

# 「真説・忠臣蔵 ～『浅野 vs. 吉良』本当の理由」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

## 1. 「元禄赤穂事件」の真実とは

「忠臣蔵(ちゅうしんぐら)」といえ、日本人なら誰もが知っている有名な「仇討ち」であり、その悲劇的なストーリーが人々の感動を呼ぶとともに、これまで数多くの人形浄瑠璃(にんぎょうじょうり)や歌舞伎、あるいは映画やTVドラマとして演じられてきた、年末年始の風物詩でもあります。

江戸幕府から東山(ひがしやま)天皇の勅使饗応役(ちよくしきょうおうやく)に命じられた、赤穂(あこう)藩主の浅野内匠頭(あさのたくみのかみ)こと浅野長矩(あさのながのり)は、彼の指南役であった吉良上野介(きらこうぜ)のすけこと吉良義央(きらよしひさ)による数々のいじめに耐えかね、ついに江戸城松の廊下において刃傷(にんじょう)に及ぶも、無念にも上野介を討ちもらしてしまいました。

浅野はお家断絶のうえ即日切腹、一方の吉良には一切お咎(とが)めなし。幕府による理不尽ともいえる裁きに対して、大石内蔵助(おおいしぐらのすけ)こと大石義雄(おおいしよしお)をはじめとする旧赤穂藩の四十七士は、数々の苦難を乗り越えて吉良家の屋敷へ討ち入り、ついに主君の仇を討ったのです。

私たちが良く知っている「忠臣蔵」は、日本人の好みに最もふさわしい物語であるといえますが、実は、最近の歴史研究では全く別の評価となりつつあるのを皆さんはご存知でしょうか。

一般的な歴史研究において、忠臣蔵はあくまで「物語」であり、江戸城内での刃傷から大石ら旧赤穂藩士の討ち入り、その後の切腹までの一連の流れは「元禄(げんろく)赤穂事件」としてとらえられています。最近では「被害者はむしろ吉良の方ではないか」という見方も出てきているのです。

刃傷が起きた日である元禄14年旧暦3月14日(西暦1701年4月21日)は、天皇の意思を直接伝えるために派遣された勅使が、江戸城内に入って将軍と面談し、天皇のお言葉を受けた将軍が挨拶(あいさつ)を返すという、勅語奉答(ちよくごほうとう)と呼ばれる最大の儀式が行われる日でした。

そんな重要な日に、よりによって江戸城内で刃傷を起こして儀式をぶち壊しにしたのが浅野であり、襲われた吉良は、城内で刀を抜くのがご法度(はつと)であったことから無抵抗でした。つまり、刃傷沙汰(さた)の本質は「喧嘩」ではなく、浅野による一方的な「傷害事件」だったということです。

確かに結果だけを見ればその通りかもしれませんが、私たちが忠臣蔵の世界で良く知っているのが、浅野が勅使饗応役としての任務の過程で受けた「吉良による陰湿ないじめ」であり、儀式当日にも吉良から面前で罵倒(ばとう)され、堪忍袋(かんにんぶくろ)の緒(お)が切れたからこそ、すべてを投げ捨

てて浅野が刃傷に及んだのだ、と誰しものが考えることでしょう。

しかし、そのようなことは、現実には「有り得ない」のです。

「吉良による浅野へのいじめ」といえば、例えば「勅使の御膳は精進料理にせよ」と直前になって言ってきたり、あるいは「200 畳(じょう)に及ぶ屋敷の畳替えは無用である」と嘘の情報を流したりしたことが挙げられ、これらの出来事からすれば、浅野が吉良を深く恨みに思ったのも無理はない、という筋書きになっています。

しかし、これらを現代に置き換えればどうなるでしょうか。重要な営業などの接待において、相手に対して葬式のような料理を出させ、さらには宿泊先の掃除すら出来ていないような有様だった場合、接待の指導並びに監督役の吉良は相手にどう申し開きをするでしょうか。

「いや、これらはすべて担当者である浅野の不始末であって、私には一切責任がありません」。

そんな言い訳が通用するはずありませんよね。つまり、浅野の勅使饗応役としての任務に落ち度があつては、指南役の吉良の責任が真っ先に問われるのですから、忠臣蔵で見られるような「吉良による浅野へのいじめ」は現実には有り得ないのです。

では、刃傷当日の「吉良による浅野への罵倒」はどのようなのでしょうか。

刃傷当日の様子が分かる史料としては、浅野を後ろから羽交(はが)い絞(じ)めにして刃傷を止めた梶川与惣兵衛(かじかわよそべえ)の記録が残されており、それによると、事実としては以下の内容だったようです。

「梶川と吉良が立ち話をしていると、誰かが吉良の後ろから『この間(かん)の遺恨覚えてるか』と声をかけて斬り付けてきた。驚いて誰がやったのかと見れば浅野であり、吉良が浅野の方へ振り向くと顔に太刀を浴びせられた」。

「あわてて逃げようとする吉良に対して浅野がまた二太刀浴びせ、吉良が倒れたところでようやく梶川が浅野を押しとどめた」。

つまり、浅野は卑怯(ひきょう)にも吉良を後ろからいきなり斬り付けたというのです。そこには「吉良による浅野への罵倒」などあるはずもなく、しかも老人の吉良に対して、壮年の浅野が何太刀も浴びせながら、殺害することすらできませんでした。

実は、この「殺害できなかった」ことが浅野自身の「資質」による影響ではないか、という見方もあるのです。

様々な記録によれば、浅野には「痞(つかえ)」という持病があったとされています。「痞」とは「胸が塞(ふさ)がって苦しいこと」ですが、最近では「気が塞ぐ」といういわゆる鬱(うつ)の状態を指し

ているというのが定説になっているようです。

つまり、饗応役の頃の浅野は精神的に不安定となっており、不幸にも儀式当日に「鬱」がピークに達し、いわゆる錯乱状態になってしまったのではないかと、いうのです。また、それを裏付ける間接的な証拠として、浅野が江戸城内において帯刀が許されている脇差(わきざし)で「斬り付けている」ということが挙げられます。

脇差のような短い刀であれば、斬るよりも刺す方が相手を確実に殺傷できます。それなのに、浅野は何度も斬り付けるだけで刺そうとはしませんでしたから、このあたりにも精神的に追い込まれて尋常でない様子うかがえる、というのです。

しかし、浅野が精神的に追い込まれていたにせよ、家臣の大石ならば何らかの事実を知っているはずではないでしょうか。何しろ大石は、吉良邸への討ち入りの際に「浅野内匠頭家来口上書(けらいこうじょうしょ)」を書き残しているのですから。

ところが、その口上には「浅野が吉良を討とうとした理由」が何も書かれていないのです。大石内蔵助が書いたとされる口上書には、以下のように記されています。

「去年三月、内匠頭儀、伝奏御馳走(でんそうごちそう)の儀につき、意趣を含み罷(まか)りあり、殿中に於いて、忍び難き儀ご座候(ごさうろう)か、刃傷に及び候…」。

主君である浅野が吉良に斬り付けた理由については「忍び難き儀ご座候か」、すなわち「何か我慢できないところがあったのか」と書かれており、家臣ですら肝心なことがよく分かっていないということがうかがえます。

以上の考えをまとめれば、元禄赤穂事件における江戸城内の刃傷沙汰は、浅野による勝手な「暴発」がもたらした「不幸な出来事」であり、被害者でしかなかった吉良に対して大石らが討ち入ったのは私刑、すなわち「リンチ」であったという結論も有り得ることになってしまうのです。

しかし、元禄赤穂事件の真実を「精神面で問題があった人物に一方的に傷付けられ、さらにはその部下に集団的なリンチを受けて殺害された事件」で片付けてしまって本当に良いのでしょうか。

もしそうであるのならば、なぜ忠臣蔵が300年以上も日本人の心をつかんで離さないのかを理解することができないではありませんか。

結論を言えば、そのような見方はもちろん全くの間違いです。歴史というものは目に見える事実を追っただけではその「真実」はつかめず、前後の大きな流れを理解しなければ「隠された大きな意味を持つメッセージ」を見極めることができないのであり、それは元禄赤穂事件においても例外ではありません。

では、元禄赤穂事件や忠臣蔵の「隠されたメッセージ」とはいったい何なのでしょう。そのカギ

を握る人物こそが「山鹿素行(やまがそこう)」なのです。

## 2. 実は「水と油」の関係だった浅野家と吉良家

儒教に由来し、上下の秩序を重んじる学問であった朱子学を、江戸幕府は公的な学問として採用しました。なぜなら、朱子学の「主君に絶対の忠誠を誓い、また徳のある者が天下を制する」という内容が幕府に都合が良かったからです。

江戸時代初期の学者であった山鹿素行も初めは朱子学を学んでいましたが、時が経つにつれて朱子学に疑問を抱くようになり、寛文(かんぶん)5(1665)年に「聖教要録(せいきょうようろく)」を著しました。

聖教要録は「武士道とは何か」を説き明かしたものでしたが、その中で朱子学を批判したために幕府の怒りを買ひ、翌寛文6(1666)年に、以前に家臣として仕えていた「ある藩」へ流罪(るざい)となりました。

実は、その藩こそが赤穂藩であり、当時の藩主は浅野内匠頭長矩の祖父にあたる浅野長直(あさのながなお)でした。

赤穂藩では山鹿素行を流人(るにん)ではなく師として迎え、素行は藩士たちに学問を教えることになったのですが、その中に幼き日の大石内蔵助義雄がいたのです。

赤穂藩に流された山鹿素行は寛文9(1669)年に「中朝事実(ちゅうちょうじつ)」を著して、儒学による当時の流行であった中華思想を批判するとともに、「日本こそが中華(=世界の中心)である」という立場を明らかにしました。

そして、その日本の中心として存在するのが「万世一系(ばんせいいつけい)の皇室」であり、神代以来絶えることなく続く皇室こそが、我が国の国体(=国家としての体制のこと)かつ中心であるという皇室尊崇論(こうしつそんすうろん)を説きました。

そんな山鹿素行の教えを熱心に学んだ赤穂藩が「尊皇の藩」となり、また当時の藩主長直の孫である浅野内匠頭長矩や、若くして素行の薫陶(くんとう)を受けた大石内蔵助義雄らが「尊皇の士」となったのは、むしろ当然だったのです。

では、もう一方の吉良上野介義央はどうだったのでしょうか。

吉良家は室町幕府以来の名家でしたが、江戸時代になって江戸幕府に高家(こうけ)として取り立てられ、幕府の儀典関係を取り仕切る家として存続しました。つまり、吉良家は「幕府大事」の家柄であり、上野介義央自身も、江戸幕府のために高家の身分を利用して「暗躍」することになるのです。

江戸幕府は慶長(けいちょう)20(1615)年に禁中並公家諸法度(きんちゅうならびにくげしよはつと)を制定して、

朝廷への統制を強めるとともに、その第1条において「天皇は学問を第一に行う」と定め、武家が「法を超越する存在」であられた天皇の地位を強引に成文化しました。

この事実一つだけでも天皇に対する幕府の姿勢が分かるようなものですが、やがて幕府は天皇の譲位にまで口を挟むようになりました。

例えば、承応(じょうおう)3年11月(西暦1655年1月)に18歳で即位された後西(ごさい)天皇は、若くして非常に英邁(えいまい、人格や才知が特別に優れていること)なお方でしたが、優秀な天皇の存在は朝廷を統制したい幕府にとって都合の悪いことでした。

そこで、後西天皇のご在位時に伊勢神宮や京都御所、あるいは江戸で大火が相次いだ(特に江戸の火事は「明暦(めいれき)の大火」として有名です)ことから、「災害が多いのは天皇の徳が足りないからだ」という理由で寛文3(1663)年に強引に後西天皇を退位させ、わずか10歳の霊元(れいげん)天皇を即位させました。

実は、この折に朝廷に対して退位の工作を行った人物こそが、若き日の吉良上野介義央であり、後に彼はこの功績によって従四位(じゅしい)に昇進しています。

なお、京都御所は寛文元(1661)年に炎上しましたが、その後の修復を幕府から命じられたのが、赤穂藩主の浅野長直でした。長直は当時赤穂城を新築中でしたが、天守閣の建造を断念までして御所を見事に再建しています。

これらの事実や歴史の流れから分かるように、浅野家は「尊皇」、吉良家は「幕府大事」と、当時の国家意識がまるで「水と油」のように全く異なっていました。そして運命のいたずらか、両家が勅使饗応役並びにその指南役として、勅使下向(げこう)の接待を担当することになってしまったのです。

実は、両家の組み合わせは天和(てんな)3年(=1683年)に一度あり、この時は浅野内匠頭長矩が無事に饗応役を務め上げましたが、当時の長矩は17歳と若かったため、吉良上野介義央の言いなりにならざるを得なかったと考えられます。

そもそも「尊皇」の浅野家からすれば、勅語奉答の儀式以外の勅使の席次は、将軍よりも上座(かみざ)であるべきですが、「幕府大事」の吉良家からすれば、将軍家が上座となるのが当然でした。それ以外にも勅使以外の席次や料理を出す順序、あるいはお部屋の位置に至るまで、両者の意見がことごとく対立するのは目に見えていました。

饗応役と指南役との意見が異なれば、指南役の考えが優先されるのが常ではありましたが、二度目の饗応役となった元禄14(1701)年は、長矩も35歳の堂々たる大名です。その心中はさぞかし無念であり、持病の「痞(つかえ)」も悪化して錯乱状態となり、ついに刃傷に及んでしまった、という考えも成り立ちそうですが、私はそれだけではないと思っています。

殿中での刃傷は、本人の切腹はもちろん藩は取り潰しとなり、多くの家臣が路頭に迷うという一大事です。それが分かっているながら刃傷に及び、しかも脇差で斬り付けるというまるで錯乱したような激しい怒りを呼んだ「ある出来事」が、両者の間にあったとは考えられないでしょうか。

### 3. 「討ち入り」に至った本当の理由

平成 24 (2012) 年 8 月、韓国の李明博(イ・ミョンバク)大統領(当時)が、我が国日本の固有の領土でありながら不法に占拠を続けている竹島に上陸しただけでなく、以下のような天皇を侮辱した声明を発表しました。

「日王(=韓国による天皇をさげすんだ呼び方)は韓国民に心から土下座したいのなら来い。重罪人にふさわしく手足を縛って、頭を踏みつけて、地面に擦(す)り付けて謝らせてやる。重罪人が土下座もしない、言葉で謝るだけならふざけた話だ。そんな馬鹿な話は通用しない、それなら入国は許さない」。

皆さんはこれを聞いてどんな感情をお持ちになりますか。普通の日本人であれば激しい憤りを感じるのは当然ですし、世界に誇れる万世一系の皇室が我が国にご存在することの気高さ、そして有難さを理解している人間ならば、「殺気」がよぎっても決して不思議ではありません。

現代の私たちですらそうなのですから、「尊皇」の藩主である浅野内匠頭長矩が「幕府大事」の吉良上野介義央に対して何らかの事情によって咄嗟(とっさ)に「殺気」がよぎり、反射的に刃傷に及んだ、とは考えられないでしょうか。

直接の原因は、吉良と梶川与惣兵衛との「会話」にあると思われます

以下は私の推論ですが、江戸城内において吉良と梶川とが会話した際、儀式のストレスでもあったのか、吉良が梶川に対して勅使(あるいは天皇)に対して悪口ともいえる不用意な言葉を放つと、近くにいた浅野が不幸にもそれを耳にしまいました。

それまでの吉良による勅使への仕打ちに対して懸命に耐え続けてきた浅野も、天皇への悪口を耳にして不意に「殺気」がよぎり、堪忍袋の緒が切れると同時に吉良への怒りが爆発し、我を忘れて錯乱状態のようになって刃傷に及んだのです。

刃傷後の取り調べで浅野は吉良への「遺恨」を認めましたが、その理由が吉良による数々の天皇に対する「不敬」であることが分かっているにもかかわらず、それを自らが口にすることは天皇の恥にもなりかねないため、原因の一切を語らずに堂々と切腹しました。

一方の吉良は「浅野の乱心であり、遺恨はない」と証言しましたが、もちろん自分の勅使に対する数々の仕打ちや、城内での不用意な一言が刃傷につながったことは分かっていました。

しかし、それを口にすれば、自分だけでなく幕府の立場をも危うくしかねないため、敢(あ)えて「分からない」ととぼけたのであり、悪口を耳にした梶川も、同じ考えで記録から「吉良の天皇に対す

る悪口」を省きました。ところが、主君と同じ「尊皇の士」である大石内蔵助義雄らの目はごまかせなかったのです。

大石らは主君である浅野が刃傷に及んだ際、その原因が「尊皇の浅野と幕府大事の吉良との対立」にあることを察知しました。そして、その後の裁きで主君が切腹して赤穂藩が取り潰しとなったのに対し、吉良が何のお咎(とが)めもなかったことに激しく憤りましたが、その怒りは主君の「敵(かたき)」である吉良と同時に、「天皇をないがしろにした吉良の背後にいる幕府」にも向けられました。

「天皇に対する侮辱は尊皇の士として絶対に許すことはできない」。そう固く誓ったからこそ、大石らは数々の試練を乗り越えた末、翌元禄 15 年 12 月 14 日（西暦 1703 年 1 月 30 日）深夜に吉良邸内へ討ち入り、上野介の首級(しゅきゅう)を挙げたのです。

ところで、「忠臣蔵」の世界では、討ち入りの際に山鹿流の陣太鼓を打ち鳴らしたことが有名ですが、実際には吉良邸の裏門を木槌(きづち)で打ち破る音か、あるいは銅鑼(どら)の音(ね)がそのように聞こえたからではないかとされており、真実のほどは分かりません。

しかし、大石をはじめ討ち入った四十七士の心の中には、藩を挙げて学び続けた「山鹿流」の精神が息づいており、少なくとも、各自の胸の奥で陣太鼓が高らかに鳴り響いていたことは間違いありません。

さて、先述したように、大石らは討ち入りの際に口上書を残していますが、そこには「浅野が吉良を討とうとした理由」が書かれていませんでした。しかし、これは「分からないから書かなかった」のではなく、「分かっているが敢えて書かなかった」のではないのでしょうか。

主君である浅野がすべてをなげうって吉良に刃傷に及んだ背景に「尊皇 vs. 幕府」があったことは、大石らも当然分かっていました。しかし、そのことを公言すれば、幕府によって揉(も)み消されるに決まっていますし、討ち入った理由に「尊皇 vs. 幕府」があったことを幕府に暗示させるためにも、むしろ書かない方が良く判断したと思われる。

そんな大石らの思惑は、討ち入り後の態度にも見受けられます。吉良の首級を挙げた大石らは、その足で主君が眠る高輪(たかなわ)の泉岳寺(せんがくじ)へ向かい、首級を墓前に供えましたが、もし大石らの考えが「主君の仇である吉良を討つ」だけであったならば、一同がその場で切腹を遂(と)げたことでしょう。

しかし、現実には大石らは幕府に対して「自首」し、自らの生死を幕府に委(ゆだ)ねました。彼らはなぜお預けの身となってまでして生き恥をさらしたのでしょうか。

もちろんそれは、幕府に対し「今度こそ『尊皇 vs. 幕府』の決着をつけてほしい」という願いがあったからに他なりません。

大石らが自首した後、幕府はその対策に苦慮しました。江戸市中で徒党を組んで屋敷に押し入り、

主君を、といっても正確には上野介は隠居の身ではありませんでしたが、いずれにせよ殺害するという野蛮な行為は、本来なら極刑、すなわち打ち首に値します。

しかし、ここで大石らを打ち首にすれば、今後の幕府と朝廷との関係がますます悪化するのを目に見えていました。だからこそ、彼らに武士の名誉としての「切腹」の処分を下したのです。

一方、大石らの切腹と同時に、吉良家は取り潰しとなってしまいました。先述したとおり「幕府に忠実な高家」であったはずの吉良家に対して、なぜ幕府は冷たい裁きを行ったのでしょうか。実は、大石らの討ち入り以前から、吉良家は既に幕府に見限られていたのです。

幕府は、大石らの討ち入り前の江戸での動きを事前につかんでいました。これは大石自身も証言している事実ですが、それでも幕府が大石らの行動を妨害せずに敢えて討たせたのは、皇室に憎まれすぎた吉良家が、もはや幕府にとって有害でしかなかったからでした。

だからこそ、幕府は大石らの動きを見て見ぬふりをしていましたが、討ち入り後に大石らが自害せず、幕府に裁定を委ねたところまで見抜いていたかどうかは分かりません。

#### 4. 「元禄赤穂事件」が「忠臣蔵」になるまで

こうして「元禄赤穂事件」は、大石ら旧赤穂藩士の切腹と、吉良家の取り潰しという結果で幕を閉じました。しかし、江戸幕府創設から約 100 年も経った太平の世に突如(とつじょ)として起きた大事件が、人々の記憶に残らないはずがありません。

討ち入りから 4 年後の宝永(ほうえい)3 (1706) 年には、近松門左衛門(ちかまつもんざえもん)が赤穂事件を題材にした人形浄瑠璃「基盤太平記(ごばんたいへいき)」を書き上げて、大坂(=現在の大阪)の竹本座(たけもとざ)にて上演され、以後も浄瑠璃や歌舞伎の人気題材となりました。

そして、これらの流れの集大成となったのが、二代目竹田出雲(たけだいずも)らの合作で、奇(く)しくも刃傷事件から 47 年後の寛延(かんえん)元 (1748) 年に、大坂で人形浄瑠璃として上演された「仮名手本忠臣蔵(かなでほんちゅうしんぐら)」でした。

仮名手本忠臣蔵といえど、浄瑠璃や歌舞伎などで現代にまで続く大ヒット作として有名ですが、その理由として、日本人好みのドラマ性以外に「隠されたメッセージ」があることを皆さんはご存知でしょうか。

仮名手本忠臣蔵の物語は、室町時代の幕府執事(しつじ)であった高師直(こうのもろなお)が大名の塩谷判官高貞(えんやはんがんだかさだ)をいじめ抜き、耐えかねた判官が師直に刃傷に及んで、その罪を問われて切腹並びにお家断絶になった後、判官の家老であった大星由良之助(おおほしゆらのすけ)らが、師直の屋敷に討ち入って首級を挙げるというもので、元禄赤穂事件を「太平記(たいへいき)」の世界の中で描いています。



当時は江戸幕府による封建社会であり、江戸時代の史実に基づく物語は上演を禁じられていたために、わざわざ太平記の世界を借りたのですが、仮名手本忠臣蔵には、誰にでも「元禄赤穂事件の引き写し」と分かる様々な要素が散りばめられています。

例えば「仮名手本」は「いろは四十七文字」のことであり、討ち入った旧赤穂藩の四十七士と掛けていますし、「忠臣蔵」は「忠臣大石内蔵助」からか、あるいは「蔵に一杯になるほど多くの忠臣」という意味が込められています。

また高師直や塩谷判官高貞はそれぞれ実在の人物ですが、高師直は吉良の役職である「高家」を、塩谷判官は赤穂の名産である「塩」をそれぞれ掛けており、さらには判官の家老である大星由良之助の妻は「お石(いし)」であり、二人合わせて「大石」となります。

ただし、仮名手本忠臣蔵にはこれら以外にも「別のメッセージ」があります。それは物語のもっと奥深くに隠されており、またそのカギを握るのは、仮名手本忠臣蔵がどこで初演されたのかということと、高師直の「官職名」です。

仮名手本忠臣蔵は大坂で初演されましたが、江戸時代の大坂といえば「天下の台所」と呼ばれ、商人が中心の町として賑(にぎ)わっていた一方で、人々は徳川家に対する「恨み」をずっと持ち続けていました。

大坂といえば、元々は豊臣秀吉(とよとみひでよし)が大坂城を建築したことなどで発展しましたが、徳川家康(とくがわいえやす)によって豊臣家が滅ぼされた際に、大坂は火の海となって多くの人々が殺されたり、あるいは捕まって身売りされたりするなど、散々な目にあいました。

やがて時が流れ、それらの「恨み」は表面上は水に流しても、心の奥底では決して忘れることはなく、せめて架空の世界でだけでも恨みを晴らしたいという思いが募っていた折に、元禄赤穂事件が起きたのです。

元禄赤穂事件の背景に「尊皇 vs.幕府」があったことを見抜いた大坂の浄瑠璃作者たちは、幕府の咎(とが)めを受けることなく、何とかして舞台の上で浅野主従の願いと自分たちの思いを果たすことができないかと考え、苦勞の末に編み出したのが「仮名手本忠臣蔵」だったのです。

なぜそう言い切れるのでしょうか。それは、高師直の官職名が「武蔵守(むさしのかみ)」だからです。

江戸時代には、大岡越前守忠相(おおおかえちぜんのかみただすけ)のように、大名や旗本が幕府によって官職を与えられていましたが、江戸城が武蔵国にあったことや、江戸が將軍家の天領であったことから、いわゆる「武蔵守」を名乗った大名や旗本は、江戸時代になってからは一人もいませんでした。

つまり、江戸時代の人々にとって、「武蔵守」とは「徳川將軍」を意味していたとともに、敵役(かたきやく)の「高武蔵守師直」が舞台の上で「死ぬ」ことによって、「將軍家の死」を表現していたの

です。だからこそ、大坂の人々は、仮名手本忠臣蔵を旧赤穂藩へのオマージュ(=敬意を表すためにつくられた作品のこと)とするとともに、舞台の上での「将軍殺し」に喝采(かっさい)を送ったのでした。

大評判となった仮名手本忠臣蔵は、程(ほど)なく江戸でも歌舞伎として上演されるようになりましたが、徳川将軍のお膝元(ひざもと)の江戸では「将軍殺し」が無視されて、旧赤穂藩へのオマージュのみが強調され、年月が経つとともに「元禄赤穂事件のドラマ化」が進みました。

やがて江戸幕府が滅んで明治の御代(みよ)となり、実名を出すタブーがなくなった頃には、元禄赤穂事件は「忠臣蔵」という日本人好みの物語として発展を遂げただけでなく、天皇による「お墨付き」まで賜(たまわ)るようになったのです。

明治元(1868)年11月、明治天皇は江戸改め東京へと行幸(ぎょうこう、天皇が外出されること)された際、泉岳寺に勅使を遣(つか)わして、大石ら四十七士を「朕(ちん)深く嘉賞(かしょう)ス」と顕彰(けんしょう)され、大石らによる主君の仇討ちを「深くお褒(ほ)めに」なされました。

明治天皇が大石らを顕彰されたのは、江戸幕府が倒れてまだ日が浅く、東京の市民にいまだに幕府への敬慕(けいぼ)が色濃く残っていたことから、同じように市民に根強い人気があった忠臣蔵にあやかっただけではという説もありますが、やはりここは「尊皇の士」であった大石らに対する「嘉賞」のお気持ちがお有りになられたと素直に拝察すべきではないでしょうか。

忠臣蔵の「物語」は明治以後もますます磨きがかかり、やがて映画や小説の世界でも人気を博すようになりました。第二次世界大戦で我が国が敗戦した後に、GHQ(=連合国軍最高司令官総司令部)によって一時は禁止されたもののやがて復活し、映画が全盛期を迎えた昭和30年代には、制作会社が競って忠臣蔵を上映したほか、昭和39(1964)年にはNHKの大河ドラマで取り上げられるなど、TVドラマ化も進みました。

しかし、21世紀に入ってから忠臣蔵の映像化が少なくなり、TVでもほとんど見られなくなったのは残念な限りですが、その背景として「忠臣蔵は架空の話で正しくは元禄赤穂事件であり、また吉良は被害者でしかなく討ち入りは大石らによる『リンチ』に他ならない」という「間違っただけ」が存在するのであれば、とんでもないことではないでしょうか。

これまで述べてきたように、元禄赤穂事件の本質は、浅野家と吉良家による「尊皇」と「幕府大事」との対立でした。山鹿素行の教えを受けて「尊皇の士」となった浅野家と、高家として「幕府が何より大切」と考えていた吉良家とはまさに「水と油」であり、両者の関係が抜き差しならないものとなったのは「宿命」でもあったのです。

吉良上野介による数々の「不敬」に耐えかねた浅野内匠頭は、すべてをなげうって刃傷に及ぶも、果たせずに切腹しました。そんな主君の無念を分かっていたからこそ、大石内蔵助ら四十七士は苦労を重ねた末に吉良邸へ討ち入って上野介の首級を挙げ、その身を幕府に委ねることによって、「尊皇 vs. 幕府」に決着をつけようとしていました。

我が国の歴史上でも稀(まれ)にみる「尊皇の士」であり、また主君の仇を討った「忠義の士」であったからこそ、我が国民は大石らの「義挙」に共感し、浄瑠璃や歌舞伎などの世界で彼らをオマージュし続ける中で、独自の物語である「忠臣蔵」が完成したのです。

史実を追い求めることは決して間違いではありませんが、それと同時に歴史の大きな流れをつかめないと、物事の「真実」は見えません。「元禄赤穂事件」という歴史的事実と、「忠臣蔵」という名の物語に対しても、両者の間にはっきりと存在する「尊皇 vs.幕府」という流れをしっかりと理解することで、私たちは、日本人としてより深く、忠臣蔵の世界に共感できるのではないのでしょうか。(完)

主要参考文献：「逆説の日本史 14 近世爛熟編」(著者：井沢元彦 出版：小学館)  
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379684>  
「国家の再興」(著者：西村眞悟 出版：展転社)

YouTube 再生リスト「真説・忠臣蔵」  
[https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML6\\_7cXJ\\_uxaFK\\_BF\\_AgHCUR](https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML6_7cXJ_uxaFK_BF_AgHCUR)

黒田裕樹の歴史講座  
<http://rocky96.blog10.fc2.com/>